日本人の酒の飲み方についてのノート

吉田集而*

日本人の酒の飲み方を、歴史的な変遷に着目して分析すると2類型が認められる。弥生時代に始まる収穫祭での酒の飲み方を原型とし、平安時代に定着してくる宴会型と、室町時代からの独酌型が派生した。そして、いずれのタイプも現在では生酔いの状態に留まるようになった。一方、飲酒に限らず生ずる〝酔った状態〟は、〝醒めた状態〟と対をなす人間にとって本質的な状態であり、〝醒めた状態〟を過度に要求する自動車の運転とは容易に調和しない。この調和を計るためには、自動車の機構そのものを考え直す必要があろう。

Notes on the Japanese Drinking

Shuji YOSHIDA*

Two types of drinking behavior are recognized as belonging to the Japanese: 1) drinking at banquets at which people were obliged to become inebriated, a habit which might have originated from the harvest festivals during the Yayoi Era and which had already become a firm custom by the Heian Era; and 2) individual drinking, which derived from the former, and which probably started in the Muromachi Era. Nowadays, the Japanese drink until they feel mellow. Ecstatic condition including the feeling caused by substances other than alcohol is essential for human beings, in addition to the normal state of being sober. Therefore, automobile driving, which requires that the human being be sober, can hardly harmonize with driving perforwance. In order to harmonize automobile driving with human behavior, it is indispensable that we reconsider the mechanism behind automobile driving.

1．イーミックな視点

日本人の酒の飲み方を考えるにあたって、2つの視点がある。まず、他の文化と比較して、何が日本人の酒の飲み方の特徴であるかを抽出する視点である。たとえば、ヨーロッパやアメリカと比べると、酒の飲み方はかなり違っているようにみえる。特にアメリカでは、酔っぱらうということは悪徳であると考えられており、酔っぱらいには極めて不寛容である。そして、悪徳はやめさせなければならないという考え方が禁酒法という法律さえ作らせた。また、ホーム・パーティーで酔う人はほとんどなく、パーティーの後は自動車で帰ってゆく。このようにアメリカ人の社会と試みに少し比較してみると、日本人の酒の飲み方は彼らとは異ったものにみえる。しかし、日米の比較だけでもとより充分であるはずがない。一般に日本人の酒の飲み方の特徴と思われているものも、はたして日本人だけのものかどうかは簡単にはいえない。たとえば、酒を酔いつぶれるまで飲むということであれば、中南米のインディオやメスティーソにもみられる。飲むことを強要する習慣ならば、中国でも南米でも、またボルネオのイバン族にもみられる。酔っぱらうことに寛容であるという点では、南米や韓国などはそうでないかと思われるし、また飲みはじめてすぐに酔ったり、酔うふりをするのは北米のサリシュ・インディアンにもみられる。ほんのわずかの例をあげただけで、日本人の飲み方の特徴らしきものも他にもみられるということになる。世界にはいくつの文化が存在するのかはとても数えられないが、言語では約4,500の数があるといわれ、言語が文化と密接な関係にあることを思

* 国立民族学博物館第2研究部助教授
Associate Professor, National Museum of Ethnology, Osaka.
原稿受理　昭和62年6月1日

えば、同じ数ほどの文化があると考えてよい。日本人の酒の飲み方の特徴をより正確に抽出しようとすれば、1つや2つの文化と比較しても、もとより有効でないことは明瞭である。

さらに、文化というのは全体を見通した上でなければ、その文化における酒、および酒の飲み方の意味を理解できないということがある。とすれば、その文化の酒の飲み方だけを見ても駄目だということになる。その文化そのものの理解を前提にしなければならない。そうすると事態はいっそう困難になる。

このトピックについての可能な視点がもうひとつある。それは比較を一切やめにして、日本人の酒の飲み方のみに集中することである。一文化内における現象を、その文化の体系内において分析し、歴史的な変遷に注目するという視点である。文化人類学ではこの視点での研究をイーミック（emic）で、ダイアクロニック(diachronic)な研究という。これと反対に、前述のような、共時的での全世界的比較研究は、エティック（etic）でシンクロニック（synchronic)な研究という。ここで行なおうとしているのは、通時的な一文化内研究ということになる。

2．外国人のみた日本人の酒の飲み方

Yamamuroは、〝Notes on Drinking in Japan〟[1]で日本人の酒の飲み方について考察しているが、著者の立場であろう、禁酒あるいは酒を飲むことの抑制が中心課題であり、中でも仏教による禁酒を過大評価している。Yamamuroの記述の、酒が神道と関係し、祭に際してのみ飲まれていたという評価は正しいが、仏教伝来以後、仏教が禁酒を徹底させたように記述しているが、それはあやしい。例として、孝徳天皇(A.D.646)から称徳天皇(A.D.770)までの合計6回の禁酒令を引いている。しかし、このことは、逆にいかに人々が酒を飲んでいたかを物語るものであり、この禁酒令によって実際に酒が飲まれなくなったというわけではない。

それに比べるとSargentの観察はより的確である[2]。1950年代の村での観察をベースとし、伝統的な日本人の酒の飲み方では、酒は儀礼に際しての状況の変化のシンボルとして、また神の恩恵を確かにするための捧げものとして、社会的な距離を縮め、集団の結合を強めるためのものとして機能しているとみる。ここまではそれでよいと思う。しかし、伝統的な酒の飲み方は、新しい酒の飲み方――思いわずらうことを減ずるために飲むという飲み方に変わってきたという点には賛同できない。これは西宮市でのアンケート調査をもとにした結論であり、伝統的飲み方は消えてしまうとさえ考えているのであるが、これは、アンケート調査の弱点と、Horton(1943)の古典的な研究[3]に影響されてのことであると考えられる。

Hortonは、56の民族の酒の飲み方を比較し、食料の少なさや、文化変容、戦争などによって引き起こされる思いわずらいを減ずるために酒を飲むのだという一般化を行なう。そして、酒を多く飲むことによって、心配をよりいっそう強くするという関係にあるとみる。しかし、こうした一般化が当を得ていないことは、Mandelbaumがすでに指摘しているところである[4]。そして、日本での違った形でのアンケート調査をあげれば、おもしろくないときに飲む酒は8.8パーセントほどで、こうした理由で飲まれる割合は村でも都市でも同様であり、一般に思われているよりも、実際にそのようにして飲まれることは非常に少ない[5]。

さて、外国人の仕事をはなれて、日本人の仕事に目を転ずると、柳田国男の「酒の飲みやうの変遷」[6]が目立つ。彼によって、日本人の酒の飲み方の基本的な点はこのときにほとんど言及されている。また、石毛直道の、柳田説を踏まえてより発展させた講演の記録が2つほどある[7][8]。私がこれから述べようとすることも、これらの仕事に多く負っている。

3．日本人の酒の飲み方

日本でいつ頃から酒がのまれていたのかは今もって明らかではない。最も古い酒は、ドングリなどのナッツ類、あるいは果実からの酒であるという説もないわけではない。しかし、その後の日本の文化史の上で一度も重要性をもったことがなく、その痕跡すら残されていないため、考慮の外においておいてよいであろう。縄文時代にはイモと雑穀が焼畑農耕で行なわれていた。その雑穀の中にはオカボが含まれていたと考えられ、このオカボから造られた酒があったかもしれない。そして、米を原料とする酒としても、その造り方も口かみ酒なのか醗酵酒なのかも充分な史料はない。ただ技法の原始性から、口かみ酒の方が先であるだろうと想像されているにすぎない。また、麦芽を用いた酒すらも完全には否定しきれない。

こうした酒の造り方についてはおくとして、弥生時代の水田稲作農耕の中での酒の飲み方から考えて

よいと思われる。水稲が本格的に栽培されはじめたのは弥生時代からであり、以後の日本は、この農耕にのっとって現在にまでいたっているからである。とはいえ、弥生時代の人々の酒の飲み方を知る直接的な資料があるわけでない。近年までに残っていた民俗学的な資料をもとにするしかない。

酒が飲まれたのは、特定の時でしかなかった。その最大のものが収穫祭であったろう。稲の刈り取りが終り、その収穫に対しての稲の神（稲魂）への感謝の祭が行なわれた。それは、神に捧げる酒（御神酒）をともなった感謝の儀式であり、来年の豊じょうの依頼の儀式であった。そして、直会で神に捧げられた酒と肴が神とともに飲食された。そこでは人人は酔った。恐らく飲めや歌えの大騒ぎであったであろう。また、酒は各自がかってに飲んでいたわけではない。大きな盃で、誰かに酌をされながら回し飲みをしていたと思われる。そして、人々は酩酊するほどに飲んだ。酔うことによって神との交流が可能になり、神人共飲食が可能になるのである。近年にまでみられた、あるいは現在もみられる農村での収穫祭が、このような形であったことを推測させる。

この収穫祭での酒の飲み方が日本人の酒の飲み方の原型である。それは、年に一回といった[限られた機会]、神に酒を捧げる[神への感謝]、そして、神前での[厳粛なる儀式]、村民が集まっての[共同飲食]、酔いつぶれるほどの[酩酊]、人につがれて飲む[媒酌]、歌や演奏のともなう[芸能]ということがこの酒の飲み方の要素である。特に[酩酊]することは重要であり、酩酊することによって神といっしょになり、また酩酊することにより村民の間の結合を強めることができたからである。酔わない人は、神と共にあることができず、また村民の中で孤立してしまうことになる。ここでは酔っぱらうことに寛容というのではなく、酔っぱらえない人こそが不徳の人であった。

史料は常民については極めて少ないが、上流の人々についてなら残っている。天皇を中心とした朝廷においても、収穫祭にあたる新嘗祭が行なわれるようになった。また、さまざまの年中行事が行なわれるようになり、宴会が一般化してくる。

その典型的な例として、平安時代の大臣大饗の宴会をみると、酒礼、饗膳、酒宴の三部からなっている。酒礼は、主人から盃で酒を飲み、その盃が出席者の間を一巡する。これが一献であり、これが三度くりかえされる。式三献はここからきている。そして、飯や汁をつけた饗膳に入る。この際も酒が巡らされる。ここまでを宴座という。その後に席を改めて、楽を奏しながらの酒宴となる。そして、飲めや歌えの無礼講となってゆく。これを穏座という[9]。

ここでは酒礼にみられる格式ばった[厳粛な儀式]、巡盃にみられる[媒酌]、音楽が奏でられる[芸能]、無礼講の[酩酊]、そして、何よりも人々が集まっての[共同飲食]という要素からなる。先の収穫祭に比べると、[神への感謝]と[限られた機会]が脱落している。宴会が神離れしていることと、さらにその回数がぐんと増えてきたことを示している。とはいえ、毎日宴会があったわけではなく、現在と比較すれば酒を飲む機会はずっとすくなかった。

こうした形の宴会は、農村部の婚礼や旅立ち、旅帰りにも残っている。そうした例では、主人は酒を強いるほどの歓待が期待される。そのため「せり盃」や「かみなり盃」といったものまで登場する[6]。そして、酔って吐いた人の面倒も少しもいやがられずにみられていた。ただし、後には巡盃という形式が変ってくる。巡盃では、盃で回ってくるまでは飲みたくとも飲めないし、逆に盃が回ってくるとどうしても飲まなければならない。この巡盃が個人にとって都合のいいように、小さな「めいめい盃」や「猪口」が個人あてに付けられるようになってくる。これによって、人々ははじめて自由に酒が飲めるようになった。

実のところ、宴会のこの形式は平安時代から現在にいたるまで基本的なパターンはほとんど変っていない。現在でも宴会には必ず格式ばった挨拶がまずなされる。その後に「乾杯」という儀式を行なう（〔厳粛な儀式〕）。この「乾杯」という掛声は、これから酒宴に入るというサインである。字からすれば新しい習慣のようにみえるが、これはかなり古いことであるらしい。そして、洋酒であろうがビールであろうが、つぎにまわる人が必ず出てくるし、自分で酒をつごうとすると、必ず隣の人がついでくれる（〔媒酌〕）。宴もたけなわとなるとカラオケなど登場してくる（〔芸能〕）。はじめの宴会があまり乱れないような場合は必ず二次会がついてくる（〔酩酊〕）。この場合は、はじめの会が宴座であり、この二次会が穏座にあたり、二次会につきあわない奴は、つきあいの悪い奴と白い目でみられる。それは驚くほどに変化していない。

しかし、日本人の酒の飲み方はこの形式だけではなかった。収穫祭・宴会型から派生してくる別の飲み方が生まれてくる。それは、米の生産量の増大、それによる常時酒をつくる造り酒屋の成立、それを

消費する都市の成立という条件の上で、[限られた機会]での飲酒が変化しはじめ、もっと頻繁に飲まれるようになる。こうした現象は室町時代初期にはすでに起こっている。応永32年、33年の北野神社文書には、造り酒屋が347軒あることを記している[10]。この頃から、酒が特別な理由なしに、飲みたいから飲むという形が出現しはじめたと考えてよいであろう。ただし、一般の人々が飲むほどには普及しなかった。

江戸時代になると、「居酒屋」と「料理屋」が出現してくる。居酒屋というのはもともとは奉公人などの人々が酒を飲むところであった。酒宴に何年も参加できないような人々が、やはり酒を飲みたくて、酒屋で、買って帰らずにそこに居て飲むところからはじまったものである[6]。現在では、現代の奉公人であるサラリーマンが、帰宅前に居酒屋に寄って飲んでゆくのはこの伝統の上にのっとってのことである。また、奉公人に主人が酒をついで飲ませる風習も出現してきた。もともとは主従が契約を結ぶ際に従者に酒を飲ますところからでてきたもので、主人とともに飲むというのではなく、従者のみが飲み干すという形であった。後にちょっとした報酬に酒を飲ませるようになり、さらに酒手として銭をやる形に変っていった。

柳田によれば、晩酌というのはこれと同じ起源であるという[6]。主人の労働のねぎらいとして、主人に酒が出されるようになったというわけである。酒を飲みたい主人が人を集めて飲むよりも、独りで飲んでくれた方が主婦にはありがたいという思惑も入ってのことである。このあたりから独酌という形が出現してくる。

一方、料理屋の方は、主として上流の人々に利用され、料理ともども芸能が関係したり、また、酌をする女性がここに現れる[7]。自分でつぐという風習——独酌にはかなりの抵抗があり、酒をつぐ人を必要としたのであろう。この系列は現在のバーやキャバレーへと発展してゆく。そして、これらはいずれも[厳粛な儀式]や[共同飲食]という要素を落としてゆく。さらに独酌になると[芸能]をも落とし、残るのは[酩酊]だけということになってくる。しかも、常に飲めるという状態になってきた。

4．現代人の酒の飲み方

収穫祭から宴会へという形での酒の飲み方では酩酊することが重要な要素であった。しかも、人々の酔い方は、ほとんどの場合攻撃的な荒々しいものではなく、おしゃべりになったり、寝てしまったりするようなものであった。酔って攻撃的な人は、人々の結合をはかるために酔うという目的からいえば、具合の悪い人であり、むしろ排除されてしまう。そして、酔った人々は、赤子にたとえられるようなたわいない存在になってしまうと見られる。日本人が赤子を純粋無垢な存在とみるのは、一種の性善説をとっていると考えられるが、それは酔っぱらいにも適用される。それ故、宴会では酔うのが当然であるし、酔っぱらった人にも当然ながら寛容であった。

しかし、近代化が進むにつれて状況は変ってきた。ストレスや欲求不満が人々により一層たまりはじめた。そのため、酒に酔うと抑制がはずれ、攻撃的になる人々が増加しはじめた。酒の上のことでの責任はとられないが、酔っていったことばは決して忘れられない。それがその後の生活に影響を及ぼすようになる。人々は酔っぱらうことに警戒しはじめた。同僚との宴会なればこそ、酔えないという状況がでてきた。しかし、一方で、ほどほどに酔わないかぎり、その共同体からはじき出される不安もある。そのため、欲求不満をもつと自覚する人々はある程度のところで酔うことをとどめようとする。そのことが逆に宴会をシラけたものにするのであるが、自己の防御の方がもとより優先する。そうした人々が出てくると、酔っぱらう奴はいわなくてもいい本音をさらけ出すバカな奴ということになる。現在では、宴会はどんどんシラけてゆき、本当の仲間内ですら酔っぱらうことは少なくなってきた。

個人で飲む方はどうか。もとより明日のことを考えて深酒することはまれである。時に心に残るウサを晴らすために飲まれても、翌日はしゃんとして働くというのが常態である。しかし、日々どのようにしても立ち行かぬと考える人々も出現してくる。社会の弱い部分にそういう人々が出てくる。そういう人々にとっては、酒は現実逃避のひとつの手段となる。そして、アルコール症へと陥ってしまう。アルコール症は個人で飲む系列からしか出てこない。

ところで、人々はどれほど酒を飲んでいるのであろうか。10代の人を入れて、男性では週1～3日以上飲む人は69パーセントに達している[11]。日常的に飲む人がかなり広くゆきわたっているとみてよいであろう。そして飲む量も日本酒に換算して、晩酌では2合位で80パーセントをしめる。酔っぱらうというよりは生酔いという程度で飲みつづけているのが実態のようである。

5．人は何故酒を飲むのか

額田のアンケートには、「酒は人生に必要か」という問いに、大部分の人は必要、あるいは時に必要と答えており、不必要とした人は男性で8.3パーセント、女性で28.1パーセントであった。そして、飲酒する理由としては、つかれをなおす、たのしむ、つき合いの3つがあげられている[11]。いかにもそれらしい理由である。しかし、本当にそれが酒を飲む理由であるのだろうか。ここに現れる理由は単に自覚された理由であるにすぎないのでないか。

現在の文明社会が醒めた精神によって築きあげられたということは間違いない。理性的に、合理的に物事を進めてきたために、現在みられるような豊かな生活が得られた。しかし、人間というものは醒めた精神だけで生きているのではない。精神人類学者である藤岡喜愛によれば、人は本来、醒めた状態と酔った状態の2つでひとつであるという[12]。私達はこれまで、醒めた精神のみに価値を見い出し、その醒めた精神でつき進んできた。いってみれば、機械ほどに誤りもおかさず、正確に着実に行なってきた。しかし、人は機械ではなく、醒めた状態だけで生きてはいない。人は酒を飲んだり、セックスをしたり、プロ野球の観戦に興じたり、賭け事に熱中したり、演劇や映画に引きずりこまれたり、音楽に聞きほれたり、なんとなくぼんやりしていたりする。このような我を忘れた酔った状態と醒めた状態とを交互にくりかえしているのである。醒めた精神は、勿論醒めた状態を評価し、酔った状態を具合の悪い状態とみる。しかし、人間の存在はこの両者のバランスから成り立っており、どちらか一方に傾きすぎる時、人は破綻をきたすのではないであろうか。

私達は、現在では醒めた状態を常に強要されている。むしろ、されつづけているといったほうがよいかもしれない。その故、人々は知らず知らずの内に、そのバランスの回復のために、そのひとつの手段として酒を飲み、酔った状態に入ろうとしているのである。醒めた状態がより強くもとめられるほど、より一層酔った状態を必要としているのだと思われる。

醒めた精神で、文明を発展させることだけが重要ではない。酔った精神における心の開放もまた必要である。藤岡にいわせると、酔うこと(酔事)は「人類全体を代表しうる存在であり、原理としてそれ自身が世界に直接に開かれている存在」である個人の、その単独生活能力を回復させること[12]ということになる。そして、そのことによって貧しい文明の発展でなく、豊かな発展が可能になると思われる。また、一般的技術や学問を進めてきたのは確かに醒めた精神ではあるが、画期的な発見・発明は、実は酔った状態と醒めた状態の境界に出現したことも忘れてはならないであろう。

6．運転することと酔うこと

自動車を運転するというのはどういうことか。それは醒めた状態を強いることである。一方で、飲酒運転というのは、酔った状態で運転することであり、運転することと飲酒は異なった状態の衝突ということになる。

人々が酔いつぶれてしまえばこんな状態はあり得ない。しかし、先に述べたように、宴会であれ個人であれ、生酔いであることが普通になってきている。生酔いの状態で醒めた状態に意識してもってゆける人もいるであろう。ただ単にそうできると思うだけの人もいるであろう。そうしたときに、この衝突が起こる。

ところが、酔った状態というのは決して飲酒だけではないのである。音楽に聞き込んでしまうこともある。あるいはプロ野球の実況放送で興奮することもある。ぼんやりとすることも起こる。運転しながら、酔った状態になることはいつだって起こるのである。睡眠中にレム睡眠とノンレム睡眠とを交互にくりかえすように、起きているときは、醒めた状態と酔った状態とが交互に生起していると思われる。

かつてのタイプライターは間違わないことを前提にして造られていた。しかし、人はすぐにミスタイプしてしまう。そこで、早くて正確に打つプロのタイピストが登場するようになる。素人は仕方なしに、紙をかえて打ちなおすか、ホワイトというペンキを塗りつけて修正し、打ちなおしていた。やがて、消字テープを内蔵したタイプライターが出現した。この出現は、人間は間違うものだということにやっと気付いたということである。前提が変ったのである。そして、タイプライターとしての、人と機械との調和がとれるようになった。

ところで、自動車と人との関係はどうであろうか。人間は間違いをおかすものであるという前提に立って、自動車は造られているであろうか。毎時105キロメートル以上になると警報が鳴るという程度のフィードバック機構しかついていないのではないであろうか。

自動車はタイプライターほど簡単な機械ではない。しかし、プロではないごく普通の人々が日常的に用いる機械であり、しかも自動車は人をも殺しかねない危険性を持つ機械である。一方で、先に述べたように、人は醒めた状態と酔った状態を行ききする。それが人の常態である。そこには必ず間違いや誤りが発生する。醒めた状態をいかに強いていても、あるいはそのように教育しても、いつ酔った状態に移ってしまうかは予測はつかないのである。

そうであるなら、タイプライターのように自動車の方を変えるしかない。間違いの種類はさまざまであろうが、それをフィードバックさせる機構、あるいは運転手自身がより一層フィードバックさせやすい機構をどうしても開発しなければならない。そして、今ある技術だけで、それは思うよりも簡単に実現できるのだと思われる。そうでないかぎり、どのようにいろいろ努力しても事故は起こりつづける。マン・マシン・システムという点からみて、現在ある自動車は人間と充分に調和のとれた機械とはいえない、なお原始的な機械に留まっているのではないであろうか。

引用文献

1) Yamamuro,Bufo: Notes on Driking in Japan, QUARTERLY JOURNAL OF STUDIES ON ALCOHOL 15,1959,pp.491-498
2) Sargent,Margaret J.: Changes in Japanese Drinking Patterns, QUARTERLY JOURNAL OF STUDIES ON ALCOHOL 28,1967, pp. 709-722
3) Horton,Donald: The Functions of Alcohol in Primitive Societies : A Cross-Cultural Studies, QUARTERLY JOURNAL OF STUDIES ON ALCOHOL 4, 1943,pp.199-320
4) Mandelbaum,David G. : Alcohol and Culture, CURRENT ANTHROPOLOGY 6(3),1965, pp.281-288
5) 田中孝雄『飲酒症』中央公論社、1986年 pp.13-14
6) 柳田国男「酒の飲みやうの変遷」『定本柳田国男集 第14巻』筑摩書房、1969年（初出1935年）、pp. 101-109
7) 石毛直道「日本人の酒の飲み方」『日本綿業倶楽部370』1983年、pp.25-35
8) 石毛直道「食べ方と飲み方」『食事の文化』朝日新聞社、1980年、pp.92-128
9) 熊倉功夫「日本料理における献立の系譜」『論集 東アジアの食事文化』平凡社、1985年、pp. 617-639
10) 加藤百一、芳賀登、横井清「人間社会と酒の機能」『生活文化史3』1984年、pp. 13-21
11) 額田粲「日本の飲酒、その現実」『現代のエスプリ144アルコール症』至文堂、1979年（初出1975年）、pp.132-145
12) 藤岡喜愛「「酔能」についての覚え書」祖父江孝男編『現代のエスプリ別冊 日本人の構造』至文堂、1980年、pp.199-215